

稲わらプロジェクトで全国大会へ

今月号のインタビューは、北海道青年農業者会議のプロジェクト発表で最優秀賞に輝いた町内の青年農業者グループ「ピンクファイブ」にお話を伺いました。

interview



みなさんはピンクファイブという名前を聞いたことがあるでしょうか？

彼らは町内の青年農業者5名で結成されるグループで、稲わらの効率的処理法を研究するプロジェクト活動を続け、その成果を発表する場である北海道青年農業者会議において最優秀賞を受賞。9月に開かれた山形での全国青年農業者会議にも出場しました。

今月の広報はぼろでは、そのピンクファイブの活動に注目してみました。

稲わらプロジェクト

聞き手 まずはじめに最優秀賞を受賞した「稲わらプロジェクト」の内容について教えてください。

鈴木 収穫後ほ場に残る稲わらを、春のロータリー耕でほ場に鋤込むんだけど、その時に稲わらが「浮きわら」という状態になって植え付け姿勢や初期の生育を邪魔するんですよ。生育後半には窒素を放出して食味にも悪影響を及ぼす

という問題もあるし。また、水を吸って重くなった浮きわらを取り除く、わら上げ作業は、女性にとっては辛く負担の大きい作業なんですよね。

一般的な方法とされている「一度ほ場外に持ち出して堆肥化し、再びほ場に戻す」というやり方は、多くのコストと労力が必要となるので、「ほ場内で稲わらを腐らせて堆肥化する」という方法に着目したんです。

聞き手 研究にはどのくらいの期間がかかったんですか？

鈴木 このプロジェクトは平成15年から3年続けたんですが、1年目は市販の資材ではなく、より低コストな独自ブレンドの資材を試作してミニ試験を実施しました。2年目は本田で試験して、浮きわら量の変化、生育・品質の向上、労働時間の変化、経済性について検討し、3年目に腐熟技術の再検証と共同作業に取り組みしました。

聞き手 取組みの効果はどう

▼インタビューに答えてくれた鈴木和紀さん



でしたか？

鈴木 浮きわらの減少、食味・品質の向上といった大きな効果が数字にも現れました。資材費や労賃、機械費用は少し増加したけど、増収により全体的には収益が上がっています。

全国大会に出場して

聞き手 このプロジェクトの成果を発表した北海道青年農業者会議では、全道各地から450名の農業後継者らが集

まる中、最優秀賞に輝き全国大会への出場権を獲得しました。全国大会（9月4〜6日）に出場してみたらためて印象はどうでしたか？

鈴木 レベルが高かったですね。いや、もう全国に出てくるような連中はハンパじゃないですよ。飲み方もハンパじゃなかった。（笑）

中には稲刈作業を途中で止めてまで駆けつけてた人もいたし、熱いものを感じましたね。農業に対する意識の高さに驚きました。

聞き手 また行ってみたいという気持ちになりましたか？

鈴木 もちろんです、また行きたいですよ。他の出場者と交流を重ねる中で、彼らからすごく勢いをもらえたと、本当にいい経験になりました。

課題を次の日から実行に

聞き手 町内にもこの成果が広がると思いますか？

鈴木 そうですね。ただ、秋は農作業が集中しているので、そこにもうひと作業加えるのは大変ということもあって、なかなか普及しない部分もあると思います。自分たちが地道に実績を作っていくけば、少しずつ広がっていくんじゃないかと思っています。

聞き手 積極的な活動のきっかけとなるものは何ですか？

鈴木 みんな普段から「ここをこついたらいい」とか課題を持って、飲み会の度にその課題を解決する方法の話になるんですよ。

ほとんどはその飲み会の中だけで完結しちゃうことが多いんだと思うけど、今回の稲わらプロジェクトもそんな飲み会での話を次の日から実行に移せたというのが大きかった。

次のプロジェクトもそんな普段の課題の中から見つければと思うし、やっぱり一番大事なのは課題を常に意識しているということなんじゃないですかね。ついでに言うと飲み会も同じくらい大事だと思うけど。（笑）

▲黄金色に輝く上葉の林さんのほ場をバックに撮影。左から、池田貴憲さん、宮坂竜一さん、鈴木和紀さん、有野直倫さん、林敦史さん。ピンクファイブというネーミングはみんなで持ち寄って「なんとなく出てきた」とのこと。

